

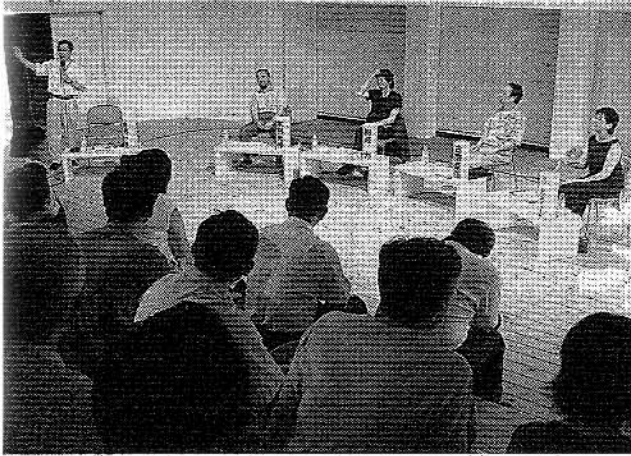
海上の森の未来考える

環境保護団体参加しシンポ

瀬戸会場



愛・地球博(愛知万博)の当初の会場予定地だった瀬戸市の「海上の森」の今後の活用策を話し合う県主催のシンポジウムが20日、瀬戸愛知県館で開かれた。万博協会の運営方法に反対し、これまで万博には不参加の方針だった日本野鳥の会もパネリストとして参加。日本自然保護協会、世界自然保護基金(WWF)ジャパンを加えた環境保護



クーラーのない瀬戸愛知県館で、熱い討論となった海上の森シンポジウム

3団体が後援して初めて開かれた。海上の森は、瀬戸市郊外の約5300畝の里山。この森を開発して万博のメイン会場とし、跡地を

宅地化する県の当初構想到、オオタカなど貴重な動植物の保護を求める声が国内外から起り、会場計画は大幅に変更。森に接する約15畝が瀬戸会場となった。

この日は、前田直登・

林野庁長官の特別講演に続き、「愛知万博の成果を海上の森の未来へ」と題してシンポジウムを開催。野鳥の会の古南幸弘・自然保護室長は「里山を守った地元のパワー、人の輪で成果を世界に発

信してほしい」と語った。また、住民団体「海上の森の会」の木村光伸会長(名古屋学院大教授)は「海上の森は、環境を論じるのではなく、命を感じる場所。万博候補地になったおかげでかえっ

て守られた」と話し、万博協会広報プロデューサーのマリ・クリスティーヌさんは「世界の関心のようになったのだから、この森で得た経験を世界に広めていくことが大事」と訴えた。【山田大輔】

なごや